

医療的ケア児への授業づくりの実践報告

京都府立井手やまぶき支援学校 教諭 大道 歩美
京都府立井手やまぶき支援学校 教諭 中平 凧映
京都府立舞鶴支援学校 教諭 鵜飼 彩寧
京都府立丹波支援学校 教諭 松本 穂之香

要約

本研究では特別支援学校で勤務する4名の若手教職員が集まり、各校での授業実践及び授業改善や自主研究について意見交流を行った。ICT機器等の活用と意志表出をポイントに置き、各校で行った授業づくり及び改善を交流し、コミュニティーメンバーの気づきや意見交流、学び等の協議を通して、共通する授業づくりのキーワードを見出した。

また、インクルーシブ教育を見据えた知的障害児との合同の授業についての交流を行い、医療的ケア児の認知、意思表示方法、得意な身体の動き、見え方、姿勢等の視点から授業改善のアイデアや必要な要素について協議を行った。

医療的ケア児が多様な子どもたちと共に学ぶためには、医療的ケア児の実態を踏まえ、授業のねらいや目標をより個別的具体的に定めることや、その目標を達成するためには私たちはどのような指導・支援が必要か考えることが重要である。

キーワード：医療的ケア児，特別支援教育，インクルーシブ教育，授業実践，ICT活用

1. はじめに（研究の背景）

日常生活及び社会生活を営むために、恒常的に医療的ケアを受けることが不可欠である児童を医療的ケア児と呼び、文部科学省の調査によると令和6年度特別支援学校に在籍する医療的ケア児の数は全国で8,700人、京都府は173人（内、訪問教育は31人）で、年々増加している。加えて、口腔内の喀痰吸引・鼻腔内の喀痰吸引、気管カニューレ内の喀痰吸引、胃ろうまたは腸ろうによる経管栄養、経鼻経管栄養の5つの特定行為以外の高度な医療的ケアを必要とする児童も年々増加している。

厚生労働省「医療的ケア児等とその家族に対する支援施策（2021）」によると、医療的ケア児が増加している背景として、医療の発展に伴い以前は救えなかった超未熟児や生まれつき病気のある乳児の命が救えるようになったことや、NICU（新生児集中治療室）の整備が進み、人工呼吸器の使用等高度な医療的ケアを必要とする乳児も退院でき、在宅でケアを受けるケースが増えたことが要因として挙げられている。医療的なケアが必要な子どもたち（医療的ケア児）は年々増え、その医療的なケアの内容もさまざまになってきた。こうした中で、教育の現場も少しずつ変化し、地域の小学校や中学校に通う子どもたちも増えてきた。「どこで学ぶか」という就学のかたちが変わりつつあり、地域の学校でも安心して学べるように、環境や支援体制の整備が進んでいる。

そもそも、「医療的ケア」という言葉はどのように生まれてきたのか。重度肢体不自由児の中には、学校にいる間に医療的ケアが必要な児童が出てきており、1991年大阪府教育委員会による「医療との連携のあり方に関する検討委員会報告書」に「医療的ケア」という言葉が自治体文書として初めてあがり、2011年には文部科学省より「特別支援学校等における医療的ケアへの今後の対応について」の通知が出され、一定の研修を修了した教員等が5つの特定行為を実施できるようになった。また、2021年には「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」として法律が整備された。

また、学校で医療的ケア児の受け入れが始まった当初、医療的ケア児は、「重度・重複障害」の学習グループに入ることが多く、知的障害の児童と一緒に学ぶことへの身体的負担や健康面・衛生面の配慮、医療機器の扱い等から知的障害児との混合での授業が難しいとされてきた。すべての子どもたちが共

に学び、互いの多様性を尊重する教育を目指すインクルーシブ教育の考え方をふまえ、重度重複障害児である医療的ケア児にとっても、共生社会の実現を見据えた学びの場をどのように築いていくかが、これからの大切な課題と捉えた。

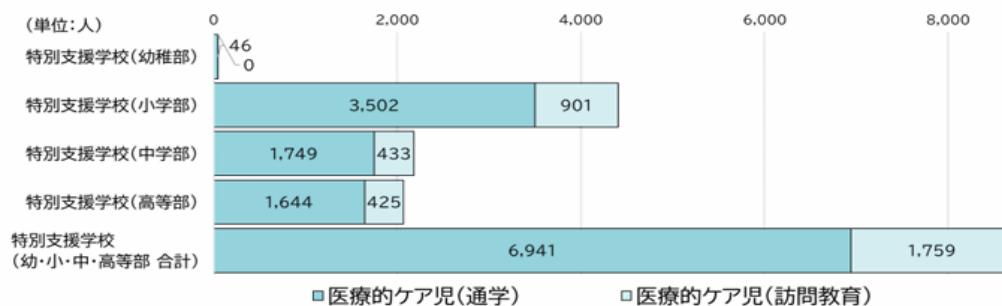


図1 特別支援学校に在籍する医療的ケア児の数

出典:文部科学省(2025)

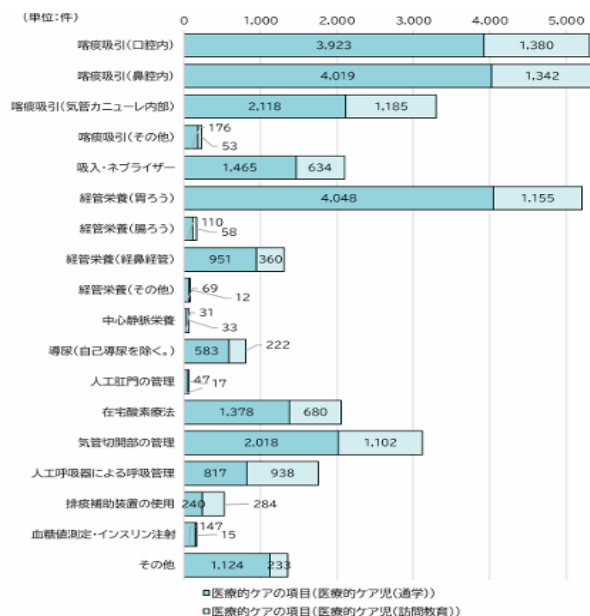


図2 特別支援学校で実施されている医療的ケアの項目

出典:文部科学省(2025)

2. 本コミュニティの目的

京都府における医療的ケア児の受け入れは、平成元年頃からである。学校における医療的ケアの教育的意義は「京都府医療的ケアガイド」で示されている。

1校に在籍する医療的ケア児の人数も少ないため、知的障害児の担任に比べて医療的ケア児の担任数も校内に少なく、教員間での連携や相談が難しい現状がある。特に、校内における医療的ケア児を担任している若手教員はごく少数で、医療的ケアに対する素朴な疑問や授業づくり等、若手ならではの初歩的な悩みを共有できない状況が伺える。

そこで、若手ならではの医療的ケア児の授業づくり等に対する悩みの共有や、他校との実践交流が必要と考え、本コミュニティは発足した。医療的ケア児を担任する若手4名が集まり、医療的ケア児、特に高度な医療的ケアを必要とする医療的ケア児の授業実践の共有、レポート作成及び交流、悩みや課題の共有、勉強会を通して各校での授業改善へとつなげた。特にICTの活用法の交流は今後より効果的な授業改善に進めていくことにつながると考える。

3. 授業づくりに関わる交流及び分析からのキーワード

(1) 京都府立井手やまがき支援学校

① 実践報告


対象	小学部低学年
教科等 単元名	遊びの指導「身体を使って遊ぼう！」
ねらい	動きの言葉を実際の活動を通して体験し、言葉の意味や概念を定着ができる。
成果	① トランポリンやブランコ等、知的障害児と医療的ケア児が同じ活動を行い、言葉の意味を定着させることができた。 ② 活動の中で自然と医療的ケア児と知的障害児の会話が生まれた。 ③ デジリハを用いたことで、いつも以上に手を伸ばす様子が見られた。
課題	医療的ケア児の安全確保



対象	小学部低学年
教科等 単元名	遊びの指導「7組劇場をしよう！」
ねらい	話の流れが分かり、言葉での表現を楽しむことや友達とのやりとりの楽しさを知り、コミュニケーションへの意欲をもつことができる。
成果	① ストーリーに沿って医療的ケア児と知的障害児が言葉のやりとりの仕方を学び、やりとりの楽しさを感じることができた。 ② 回数を重ねることで、セリフや出番を理解し主体的に演じる姿が全員からみられた。 ③ 劇に必要な大道具を全員で協力して作ることができた。協力する中で自然と医療的ケア児と知的障害児のやり取りが生まれていた。
課題	役になりきった動きやセリフの言い方ができるまでには至らなかった。



対象	小学部中学年
教科等 単元名	遊びの指導「スイッチで遊ぼう！」
ねらい	スイッチを押すと機器が動くという因果関係をつかむことができる。
成果	① 友達に「〇〇ちゃん押して」と声をかけてもらうことで、自分からスイッチを押そうとする姿が見られた。 ② スイッチを用いることで友達と同じ遊びを共有して楽しむことができた。
課題	スイッチで動かせる機器のバリエーションが少なく、同じような遊び方になってしまった。

	スイッチで動かせる機器を探し、またそれを使った遊びを考え広げていきたい。
	

対象	小学部中学年
教科等 単元名	自立活動「どっちが〇〇？」
ねらい	物の大きさや、量などの概念を獲得する。視線入力装置やスイッチを用いて、自分が選びたい物を選択することができる。
成果	具体物を使って学んだ後の確認問題として用いたが、医療的ケア児の理解度が分かりやすかった。クイズ形式で取り組んだがよく見て考えている姿が見られた。
課題	クイズ形式にしたことで楽しめた児童もいる一方で、恐る恐る選択する児童もいた。正解することだけが目的ではなかったが、結果的には正解しなければと思わせてしまったのかもしれない。

② 分析

<ul style="list-style-type: none"> ・ 「かごめかごめ」や「かくれんぼ」などの昔ながらの遊びや、感覚を楽しむ遊びを通して交流を深める中で、医療的ケアが必要な子どもと知的障害のある子どもと一緒に楽しめる遊びには、様々な形があることがわかった。おはなしあそびやゲーム等の中で体験することを通して、概念が育まれることも大切だと改めて感じた。 ・ どのように気持ちや考えを表しているのかを知り、その表現を丁寧に受けとめながら指導や支援の工夫を重ねていく中で、子どもたちの意思表出の幅を広げていくことにつながることに気付いた。視線、スイッチ操作、表情、声など様々な手段があり、どのように表出するか可能性は無限であり、「伝えたい！」という気持ちが重要。 	<p>KEYWORD</p> <p>多様な子どもが共に遊べる遊びの指導</p> <p>意志表出の機会</p>
---	---

(2) 京都府立舞鶴支援学校

① 実践報告

対象	小学部1～5年
教科等 単元名	遊びの指導「じぶんだけのいろ」
ねらい	①泡をつぶさないように力加減を意識して、紙に色を付けることができる。 ②様々な模様のある紙を組み合わせようとする。
成果	①デジタル絵本を導入で使用したため、児童が楽しんで活動に取り組むことができた。 ②泡が繊細なことを伝えると、優しく泡をすくっていた。 ③テーマを決めてから、紙を選んだりちぎったりする等作品づくりに取り組む姿が見られた。
課題	①休みの児童は経験できないモダンテクニックがあった。 ②時間が経つと泡がつぶれてしまうため、動きがゆっくりな児童にとっては難しか

	った。
	

対象	小学部1～5年
教科等 单元名	生活单元学習「ようこそ！フレッシュ☆エコエコ堂へ」
ねらい	枠の中へ材料を並べて、商品を作ることができる。
成果	最初は枠の中に材料を入れることが難しかった児童も、繰り返し商品づくりを設定したことで、枠の中に入れられるようになった。
課題	キーホルダーづくりでは、ペットボトルの蓋を細かくしたものを使用したため、材料をつまむ動作が難しい児童もいた。

② 分析

<ul style="list-style-type: none"> 今回の单元ではモダンテクニックを繰り返し行うことはできなかったが、来年再来年にモダンテクニックを児童が取り組んだ時に以前経験した活動であると感じられるのではないか。 幅広い実態の中で工夫して授業を行うことができた。 	<p>KEYWORD</p> <p>幅広い実態</p>
--	---

(3) 京都府立丹波支援学校

① 実践報告

対象	小学部高学年
教科等 单元名	生活单元学習「あきまつり」
ねらい	「祭り」を題材として、友達や指導者とともに、その文化や楽しさに触れることができる
成果	動画でお祭りのイメージをもち、TVに映った2択のクイズに答えたり、簡単なルールを守って屋台遊びに取り組んだりすることができた。
課題	指導者や友達からの支援を受けて行動する場面があり、自ら理解して行動できるような工夫をする必要があった。



対象	小学部高学年
教科等 单元名	生活单元学習「にんじゃでござる」
ねらい	校外学習の見通しをもったり、振り返ったりすることができる。
成果	①忍者になりきって活動に取り組む場面や、自ら活動に取り組む場面があった。

	②スライドやクイズで場所や行き方の見通しをもって校外学習に行き、写真で誰と行ったか何が楽しかったか振り返ることができた。
課題	①児童一人一人への支援や教材の提示方法が各指導者任せになってしまった。 ②個人での活動が主となり、友達と関わる場面や指導者と関わる場面が少なかった。

② 分析

・調理では、どの工程を中心にするのか、同じことを繰り返すことも考えながら検討していくのも一つである。	KEYWORD 同じ活動の繰り返し
--	----------------------

4. 医療的ケア児が活用できるICT機器

(1) デジリハ

デジリハとは、デジタルアートとセンサーを活用した障害児者向けのリハビリツールである。ゲーム感覚で楽しみながらリハビリに取り組むことができる。

壁に映し出した映像を直接タッチすることが可能であり、医療的ケア児と知的障害児と一緒に協力しながら楽しむことができたのはもちろん、「○○ちゃんこっち！」「ここは僕がタッチするよ！」等の主体的なコミュニケーションを引き出すこともできた。また、映像がスクリーンで映し出される為、見ている友達もデジリハをやっている友達の様子を見ながら、「もっと上！」等全体が一体となって楽しむことができた。

壁に映し出す方法以外にも、手指の動きを感知するセンサーや手の振動を感知するセンサーを使い、側臥位で注入をしている時間や注入後の安静時間に医療的ケア児一人で手を動かす運動や手首を振る運動に取り組んだ。ゲームを通して自分で肘窩を支えながら前腕～指先を使う運動を行ったことで、回数を重ねるごとに腕を伸ばす時間が伸びたり、可動域が広がったりする効果が見られた。何よりも、医療的ケア児本人の「楽しい！」「もっとやりたい！」という気持ちを引き出すことができたのがよかった点である。

①



②



③



- ① 手の開閉に連動して画面上の青虫がはっばを食べるゲーム
- ② 手で果物を握り、指定されたカゴに落とすゲーム
- ③ 手を揺らし、振動を起こすことで画面上の卵が割れるゲーム

(2) MaBee

MaBee (マビー) コントロールモデルはおもちゃやライトなど、単三の乾電池で動く製品をスマホ専用のアプリでコントロールできるようになる電池型IoT製品である。専用アプリを使用して操作することで、おもちゃを動かしたり等様々な遊び方を楽しむことができる。タブレット端末を振る、傾ける、大きな声を出す等様々なアクション方法があるが、今回はタブレット端末にスイッチをつなげ、スイッチを押すことでMaBeeを入れた電動霧吹きや電動シャボン玉機を動かすようにした。電動霧吹きを友達に持ってもらうことで、「○○ちゃん押して！」等医療的ケア児と知的障害児が共に楽しめる活動になった。また、医療的ケア児も、自分が押すことで友達が持っている道具にアクションが起きるといふ因果関係をよく理解しており、いつも以上に頑張っスイッチを押すことができた。



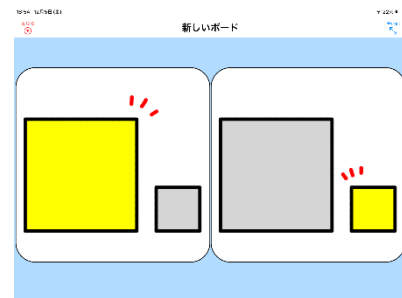
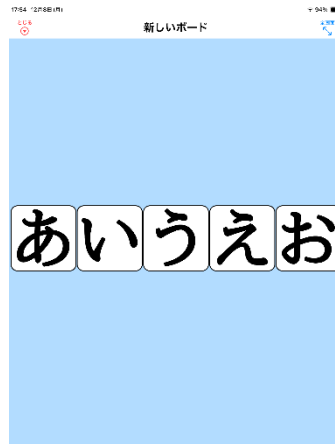
(3) えこみゅ・かなトーク

「えこみゅ」とは、株式会社 LITALICO が提供している、発語によるコミュニケーションが難しい子ども向けの音声付き絵カードアプリである。今年度、SMA1 型の児童に向けて日常生活におけるコミュニケーションツールとして導入した。最初は、カードを 10 枚に限定して使い方を学び、徐々にカードの枚数を増やしていった。「おはよう」「好き」等の一語文から始まり、3 学期には「〇〇さん」「おはよう」と 2 つのカードを組み合わせ、友達に向けた挨拶を自主的にしたり、「口」「吸引してください」といった自分の要望を指導者に伝えたりすることができるようになった。このように、「えこみゅ」は既存のカードで会話していくのに対し、それ以外の突発的な会話が必要な時は「かなトーク」というアプリを用いた。「かなトーク」とは、入力した文字や文章を合成音声で読み上げる発話障害や身体障害がある方向けのコミュニケーション支援アプリである。「えこみゅ」だけでは、難しい「好きな〇〇は？」等の質問に対して「〇〇」と打ち込み答えることができた。知的障害児からの質問に、医療的ケア児が答えることができ、主体的なコミュニケーションを促す支援として有効であった。今年度は、必要な時にタブレット端末を指導者が提示していたが、タブレット端末のアクセスガイド機能を使い「えこみゅ」や「かなトーク」のアプリに画面を固定し、常に傍らに置くことでより主体的なコミュニケーションを支援できるであろう。また、今後伝えたい文章が 3 語文以上に増え複雑になっていくことを見越して、「えこみゅ」と「かなトーク」以外の意思表示方法を考える必要もある。



(4) DropTap

DropTap とは、2,000 語以上の視覚シンボルが収録されており、シンボルをタップすると音声が出る仕組みで、絵カードの代わりに意思表示をすることができる。この DropTap にスイッチをつなげ、スイッチで選択できるようにし、国語や算数の授業の中で用いた。「‘あ’はどれ?」「‘おおきい’はどっち?」等の質問に 2 択や 4 択の選択肢のカードから答えた。カードを選択するカーソルは移動式なので、カーソルが答えの上に来た時にタイミングよくタッチすることで選択できる仕組みである。



5. まとめ

今年度の授業づくりにおいては、対象となる医療的ケア児の認知の特性や意思表示の方法、得意な身体の動き、見え方、姿勢など、個々の実態を丁寧に把握し、それに基づいた教材・教具の工夫を心がけた。また、授業づくりに関わる他校との交流を通して、実践の成果や課題を共有し合う機会を得た。

その中で、各校の実践から得られた知見をもとにキーワードを分析することで、医療的ケア児の授業づくりにおける重要な視点や工夫のポイントに気付くことができた。今後は、こうしたキーワードをもとに、より実態に即した授業づくりの在り方を明らかにし、インクルーシブな教育実践の深化につなげていきたい。

本研究では、6つの授業事例をもとにキーワードを抽出したが、今後さらに多くの授業を分析することで、より本質的かつ重要なキーワードを導き出すことが可能であると考えられる。これらのキーワードをもとに、医療的ケア児への授業づくりにおける重要な要素を明らかにし、授業実践における具体的なポイントを提示していきたい。

また、インクルーシブ教育の視点に立った授業づくりにおいては、医療的ケア児や知的障害のある児童生徒が「ただ一緒に授業を受けること」自体を目的とするのではなく、それぞれの実態やニーズを的確に把握した上で、医療的ケアがあることによって生じる制約に対してどんな工夫や手立て、環境設定ができるか考える必要がある。

すべての児童生徒が学びに参加し、達成感を得られるような授業設計が、真の意味でのインクルーシブな教育実践につながると考える。

多様な子どもたちと共に学ぶ授業づくりにおいて、以下の2つの視点が特に重要であると考えられる。

1. 自分の身体を最大限に動かすこと
2. 自分の意思を表出し、他者とやりとりをすること

これらの視点を踏まえた教育実践を行うためには、ICT機器の活用による環境設定が不可欠である。例えば、身体の動きを支援する機器や、意思の表出を助ける意思伝達装置などを活用することで、医療的ケア児が自らの力を発揮し、他者とつながる機会を広げることができる。

今後は、こうしたICT機器を活用した個別的なコミュニケーション支援の方法について、さらに模索を続けていくことや、自己研鑽をおよび授業改善を継続して行い、授業事例数を増やしていきたい。また、さまざまな支援機器が児童生徒の行動や学びにどのような変化をもたらすのかを研究し、その効果を数値的に可視化・検証することで、医療的ケア児への教育的効果についても具体的に明らかにしていければと考える。

【参考文献】

- 大阪府教育委員会『医療との連携のあり方に関する検討委員会報告書』（1991）
<https://www.pref.osaka.lg.jp/ol80010/kyoikusomu/index.html#p1>（2026/2/5 最終閲覧）
- 京都府教育委員会『京都府の特別支援教育医療的ケアガイド』（2023）
- 株式会社デジリハ <https://corp.digireha.com/>（2026/2/5 最終閲覧）
- 厚生労働省による『医療的ケア児等とその家族に対する支援施策（2021）』
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougai Shahukushi/service/index_00004.html
（2026/2/18 最終閲覧）
- 文部科学省『医療的ケア児についての理解』（2020）
<https://jvnf.or.jp/home/wp-content/uploads/2020/07/caremanual5.pdf>（2026/2/19 最終閲覧）
- 文部科学省『令和6年度学校における医療的ケアに関する実態調査結果』（2025）
https://www.mext.go.jp/content/20250715mxt_tokubetu0000043733_1.pdf
（2026/2/5 最終閲覧）